



## 一度は主将を外されるも 自らができることを全う

主将 兼川加風斗  
(市立船橋高校)

部員が130人を超える大所帯だ。先発メンバーに名を連ねるほどのプレーはできなかったが、同級生からは「一番キャプテンらしい」と目され、新チーム結成後はすんなり推挙され主将に就いた。秋の県大会では早々に敗退してしまい、選手たちは共通の目標を失いかけていた時期があった。強い個性を持った主力選手が塊になって突き進んでいくような雰囲気はなく腐心した。見かねた首脳陣は、冬に主将を内野の主力である大野七樹に交代させた。

兼川に非があったわけではなく、「何事にも率先して気を配り行動する兼川に、他の上級生が頼り切っている雰囲気を感じたから」(海上雄大監督)だった。主力選手たちにもチームをけん引していく当事者意識を植え付けさせたい、という思惑からだった。

兼川は再び主将に就くと、学校生活や練習中の振舞いなど自分の行動をきっちりやり切ることから始めた。「しっかりとやる兼川が言うなら仕方ないな」と思われる存在になってチームを引っ張っていくことが、個性派集団を統率するのには近道だと感じたからだ。



伝令では「攻めの気持ちで!」とナインに激

と同様につまずいたチームだったが、夏は一戦ごとに力を発揮でき、決勝まで駒を進めた。ポテンシャルのある選手たちが点ではなく線で繋がっていく実感があった。最後は惜しくも優勝を逃したが、3年生の仲間たちから「ありがとう」と次々に声を掛けられた。「長くBチームで試合をしていた自分は、ベンチに入れない選手たちの気持ちもわかる。そういう選手



決勝で敗れはしたが、尊い経験を手に入れた

がリーダーになる意味は大きいと思う」と、自分が辿ってきた高校野球人生を振り返った。

常時グラウンドに立っていないくても、やれること、やらなければいけないことは沢山ある。一朝一夕では語り尽くせない多くの要素が、スパイスのように味を効かせ合いながら、チームという料理が出来上がっていくことを再確認した夏だった。高校で野球に一区切りをつけるが、悩みながらチームをまとめた経験を社会へ出ても生かすつもりだ。